



夢追人VI

かとう学園 宗像市立河東中学校
学校通信第36号(R4. 11. 24)

生徒会役員へのバトンをつなぐ立会演説会

22日(火)本校体育館で、次期生徒会役員を選出する立会演説会を行いました。15名の立候補者と応援責任者30名、総勢45名による演説。1時間を超える熱弁と熱演。これはスピーチコンテストなのか?と錯覚してしまうほど、候補者も応援者も優れたスピーチでした。身振り手振り、アクションやパネルを交えての豊かな表現。生徒・教員合わせて700人を前に見事な演説。河東中の人材の豊富さを感じました。

また、それを支えるフロアの真剣に演説を聴く姿勢も素晴らしかったです。新役員のもとでさらに新しい生徒会の取組と新たな伝統が築かれる予感のする演説会でした。今回当選しなかった人も含めて新しい河東中の時代を創ってほしいと思います。アメリカ人が最も尊敬するリンカーンは、議員に立候補して5回当選できませんでした。最初予定していた形とは違う形で河東中のために貢献してほしいと思います。



演説を聞きながらメモしていた言葉です。「働くミジンコ増殖計画」「誰一人として取り残さない」「自分らしく過ごせる学校にするため、メガネのような存在になる」「口先だけでなく結果を出す」「じっくり考える。しかし、行動する時が来たら考えるのをやめて進む。」「地域の人とキャップ集め」「偉人の名言ポスター」「ブロック対抗あいさつコンクール」「クリーンアップコンクール」「動く書記」…何か新しいことをたくさんやってくれそうな生徒会が誕生しそうです。

児童虐待防止ビラ配りボランティア活動に68名の河東中生が参加

18日(金)放課後、宗像市教育委員会・宗像市役所・宗像警察署の職員の方と協力して、児童虐待防止のビラを配布しました。サンリブ、マックスバリュ、ルミエール、トライアルの4会場に分かれてボランティア活動を行いました。買い物客や街ゆく人に啓発することで、救われる子どもが一人でもいればとの思いでたくさんの生徒が参加してくれました。ここでも、地域の方から河東中生に対してたくさんのお褒めの言葉をいただきました。



県立高校の先生と県教育庁高校教育課の方が河東中のICT教育を視察



21日(月)河東中のICT特にタブレットの活用について、県立高校の先生と福岡県教育庁高校教育課の方が視察に来られました。県立高校でも一人一台のタブレット配布が決まったことを受けて、その準備のためです。河東中の生徒と先生方のタブレットやICTの有効活用を評価されてのことです。藤田先生・賀門先生・甲斐先生・古賀先生・野口先生が、9年1234組、8年5組でそれぞれICTを活用した授業を公開してくれました。

真剣に物事を考える人のもとには天から梯子がおりてくる ～ “炎のマエストロ” 指揮者・小林研一郎さんの言葉～



文化祭での合唱コンクールの素晴らしさの記憶は一か月たっても色あせません。合唱の歌声、華麗な指揮や伴奏も忘れられません。今回紹介するのは、世界で活躍する名指揮者・小林研一郎さんです。82歳になられる小林さんは、現在も週に一度2時間を超える公演でタクトを振っておられます。

音楽との出会いは幼少期です。小林さんが生まれて間もなく、太平洋戦争が始まりました。B29の爆撃の合間に、お父さんがピアノで「月のさばく」を弾いてくれたことです。右手だけのとつとつとしたメロディから始まり、クライマックスになると左手が加わり転調して曲の雰囲気

が変わった瞬間、音色のすばらしさに心を奪われました。小学生の時、ラジオから流れてきたベートーベンの「第九」のメロディの美しさに衝撃を受け、音楽家を志します。

しかし、音楽で生きることのきびしさを考えたお父さんは、小林さんが音楽をやることに反対し続けます。レコードを聴くだけでとがめられるようになりました。しかたがないので朝4時に起床して街灯の下で、または深夜の月明かりで楽譜を読み、蓄音機から音がもれないようふたを開けずに耳をくっつけて聞きました。ところが、隠れて練習していることを知ったお父さんは、「音楽なんてやめろ」と怒りました。

それでも音楽への情熱はやみがたく、深夜にこっそり小学校の講堂に忍び込んでピアノを弾きました。辺りは真っ暗で楽譜は見えないので、月明りの下、即興でベートーベンの曲を弾きました。この音じゃない、この音でもない、そうやって一音一音、音を探り、三和音を出せた時の喜びは何とも言えぬものがありました。

転機が訪れたのは中学2年生の時です。NHK 作曲コンクールに応募した作品がラジオで放送されました。これを境にお父さんも態度が変わりました。地元福島から東京の先生のもとに通うようになりました。レッスンのある日は深夜3時に起床、4時の汽車に乗って東京へ向かいました。

大学の作曲科を卒業した小林さんは、ある日、「作曲家たちが残した作品の魅力を掘り下げ掘り下げ、その素晴らしさを伝える指揮者になろう」と思い立ちます。そこで再び大学の指揮科に入りなおしました。26歳の時です。卒業後、指揮者のコンクールに出たくても、残念ながら多くのコンクールには29歳までという年齢制限がありました。

あきらめかけたころ、ハンガリーのブタペストで新しく国際指揮者コンクールが開かれると耳にしました。年齢制限は35歳。この時、小林さんは34歳。真剣に物事を考える人のもとには天から梯子が降りてきます。ただ、コンクールの課題曲は170曲。大学時代に勉強したのは10曲程度。試験に出るであろう70曲にしぼり、おふろに入る時も曲を覚えながら、3時間睡眠で臨みました。そして、1974年第1回ブタペスト国際指揮者コンクールで見事優勝を飾りました。

小林さんは、インタビューでこう語っています。

「一途に何かに打ち込むことがいかに大切か。それを今の若い方々へお伝えしたいと思います。神様から与えられたこの人生、いろいろな世界で挑戦し、いろいろな経験を積み、ひたむきに生きてほしいのです。一途に打ち込んでいればいつか希望の光が見えてくるものです。」

『自分はこれだけ努力したけれど、まだこのくらいのかしかな。だから何とでもしてください』そう祈る気持ちで今も指揮台に立っています。指揮をする時に楽譜は一切見ません。それは一流の音楽家である団員に対するリスペクトであり、楽譜を見るわずか0.1秒が団員の士気を一気に下げるからでもあります。

ベートーベンの残した楽譜を見ていると、この年になった今でも新しい発見があります。僕はそれを“行間の宇宙”と表現していますが、ベートーベンが行間に込めた思いをくみとろうとする旅は奥深く、終わりがありません。ベートーベンが求めたものを求めて必死真剣に指揮をしていると、ベートーベンが降りてきて僕の体を動かしてくれているような感覚になることもあります。それほど音楽と一体になりこの年まで仕事ができて、本当に幸せです。同様に、一人でも多くの若者に仕事を通して幸福を味わっていただきたいと切に願います。」